

前提は技術ではなく人間だ ～インドで見つめなおす主体性と橋渡し～

東京大学 公共政策大学院 国際公共政策コース
西山ゆうな

私は2026年2月18日にインド AI インパクト・サミットの公式サイドイベントであるミニ・イノベーションワークショップに参加した¹。本サミットは2月16日から20日にかけてニューデリーでインド政府主催のもと、AI のインパクトを人類全体の利益や包括的成長、地球環境保護に繋げることを目指して開催された。モディ印首相、マクロン仏大統領やグテーレス国連事務総長をはじめとし各国政府、国際機関、AI 関連企業の代表が集い、日本からは高市内閣総理大臣がビデオメッセージを寄せた。ニューデリー市内では道路沿いやバス停など数十メートルおきにサミットの看板が設置されており、国を挙げた力の入れぶりが感じられた。

私が参加したミニ・イノベーションワークショップは NICT（日本）と CEIMIA（フランス）、Inria（カナダ）の [GPAI 専門家3センター](#) が連携で実施する学生コミュニティプロジェクトの一環として開催された。本プロジェクトでは学生が若者視点からの AI に関する各国経験や課題の共有・議論を行っており、今回はインドの教育関連団体 CEMCA と共催することでインドでの学生コミュニティ立ち上げ支援を行うことも目的の一つであった。

当日は7カ国から60名の学生が会場に集い、丸1日活発な議論と交流を行った。私は日本からの学生代表として午前中、日本での活動発表と他国学生とのパネルディスカッションを全体向けに行った。そして後半はイベントのメイン活動として学生の関心を元にテーマ別に分けられた少人数グループで活動した。私は「AI と教育」がテーマのグループ1で、インド人学生十数名、日本・インドからのファシリテーター4名と共にワークショップ形式で議論を行った。



写真1：ワークショップ後のグループ発表の様子

¹活動詳細は [AI サミット参加報告](#), [ミニ・イノベーションワークショップ](#) 記事も併せてご覧頂きたい

ローカライズした教育用 AI 開発への熱意

今回の議論で一番私が圧倒されたのは、インドの学生たちが、教育現場で使われる AI そのものを自分たちの手で変えるんだという強い熱意を持っていたことだった。私たちの班では冒頭、教育での AI 使用の問題点を特定することから話し始めた。そこではまず教育現場での AI リテラシーの欠如や生徒・教師の AI への適応不足が日本での議論と同様に上がった。

その一方、インドの文脈において日本と異なる形で強調された問題意識が 2 点あった。1 点目は自国言語・文化に対応した形でローカライズされた AI システムの不在だった。今回話したインドの学生は学習においては英語で AI を使用することが多く、自国言語に十分に対応した AI がない事を共通の問題意識として挙げていた。これにはインドの多様な文化的背景が影響しているように思う。ランチ休憩の時間、同じ州から来たという 3 人のインド人学生と一緒に話した際、彼らのように同じ州出身の友人同士でも地域で使う言語がそれぞれ違うことを教えてくれた。多様性が大きいからこそ、英語データがメインの海外製 AI を自国言語で使いこなせないことから来る問題意識、また英語使用だけが AI で助長される懸念をインドの学生たちは抱いていた。

そしてもう一点は、十分に教育使用向けにカスタマイズされた AI システムの不在であった。コンピュータ・サイエンスを専攻する学生は特に生徒の批判的思考能力を奪うようなシステム自体を改良したいという意欲が強く、その必要性は他専攻の学生も当然の如く同意していた。さらには教育向けに改良が必要であることを超え、自国製で ChatGPT に代表されるような、生成 AI を支える基盤モデルを開発する将来も見据えていた。実現可能性は分からないが、この熱意と自国の技術力へのプライドは、インドが将来自国産 AI 開発を進めていく可能性を感じさせた。

インド人学生が AI システムそのものの課題に注目していたことは「技術に対して人間が受け身になりすぎてはいけないのだ」という、私の研究活動にも関わる新たな気づきを私に与えてくれた。私は現在高校生向けの AI リテラシー教材を作成しているが、教材内容は技術を基本的にはそのまま受け入れたうえで「AI の使い方を変える」「AI で問題が起こった際の社会での合意形成を考える」というアプローチとなっている。しかしこの前提自体が生徒に対して技術ありきの「受け身の向き合い方」を植え付けていることに気づかされた。生徒に AI システム自体を変える権限や能力が教える時点でなくても、AI の仕組みや問題を学んだうえで AI 自体をどのように設計すべきか？ ありがたい社会から逆算してどう改良すべきか？ これらを考えることがこれから AI 時代を生きる生徒には本質的なリテラシーとなるだろうことをインドで教えられた。

日本でもインドでも問われる課題 ～橋渡し役は誰？～

一方で「これは日本と同じだ」と一貫して思っていたことがある。それは視点が異なる者同士で意見を融合させる過程が不十分なまま議論が進む傾向だ。教育学専攻の学生は教育現場での AI 適用を教える内容や方法で解決しようと主張しがちなのに対し、IT バックグラウンドの学生は AI そのものの改良を通じた問題解決を重要視する傾向にあった。多様な意見は価値であるが、落としどころを見つけて議論を収束できるか怪しい事態に直面した。私は日本で似たような経験があったので、終盤は止まらない意見を無理やりさえぎって双方の意見をまとめる役割を担い、最終的には政策提案とプレゼンテーションをまとめた。政策案は具体的には、異なる 3 アクターの知見や視点を議論し融合するための場を作ることがポイントだった（図 1 参照）。そこでの多角的な意見集約を元に

国内のプロバイダーが地域の文脈を踏まえた教育用 AI システムを開発させると並行して、政府が生徒・学生向けに学校での AI 使用ガイドラインとリテラシーを学ぶためのカリキュラムを作成する仕組みだ。この案でも、視点の違いを乗り越えるため政府を介して開発者と教育現場の知見を集約する点がポイントになっている。

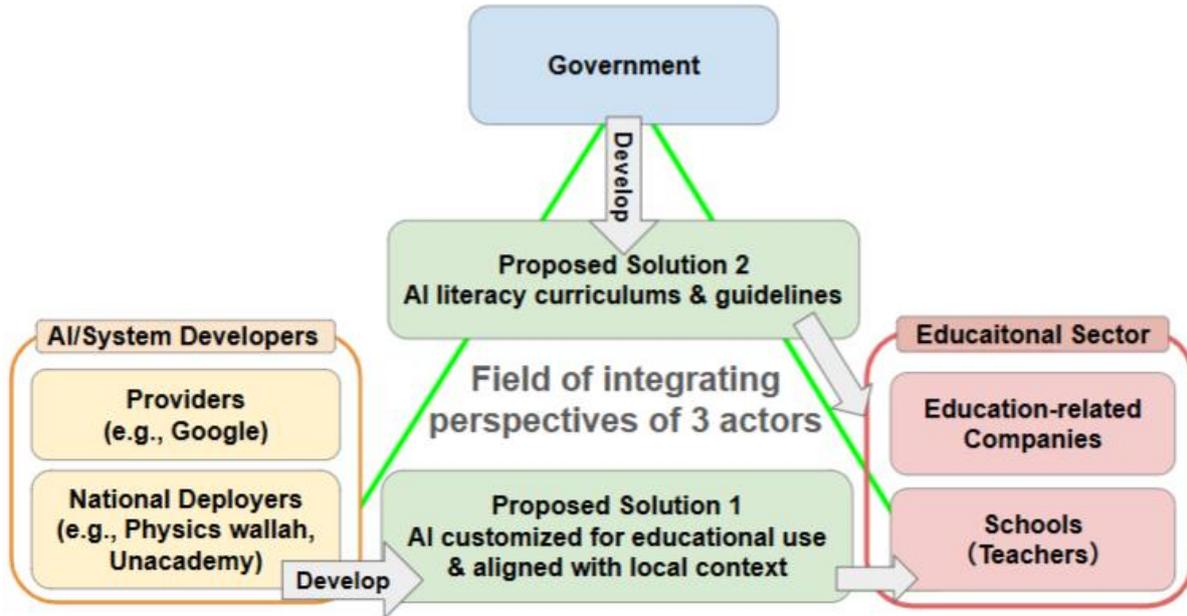


図 1 : 3 つのアクターの視点統合を軸とした政策案の構成

さらに視点の相異からくる意見の対立、議論の着地の難しさは有識者のパネルディスカッションでも明確に感じた。サイドイベント「Asia AI Diplomacy - Governing AI in a Fragmented World」ではプデタジキスタンからの登壇者であるアジジョン・アジミ氏が EU ACT 等を例に挙げながら、自国での AI 利用・開発に関して十分な裁量を与えてほしいという訴えをしていた。話しぶりからは先進国の枠組みを一方向的に押し付けられるもどかしさが滲み出ているように見えた。またスチュアート・ラッセル教授は将来インフラになるだろう AI のリスクや不確実性に関して、電気や原子力発電が規制で制御されてきた歴史を振り返りながら、AI も同様に制御可能だろうと論じていた。興味深い例示だと感じた一方、福島県に原発事故発生当時住んでいた私はこの例えに共感出来なかった。自国での大規模な震災・津波リスクがあるかによって原子力リスク認識が異なるように、AI プロバイダーの有無、技術力、政治力で AI のリスクやそのための規制に関する認識が異なることを突き付けられた。

開発者と利用者、先進国と途上国、規制をリードする国と受け入れざるを得ない国。対立項の間にある溝と、溝がある世界でもその先にいる人々に自分の意見を伝えようとする人々を目撃し、また、身をもってその議論を体験したことは私の財産になった。今回のような国際的な学生イベントの意義はこの溝を「橋渡し」する人材を育成することにあると思う。AI という技術に対して専攻や国籍、立場の違う学生が違いを理解したうえで、それでも合意形成を図ろうと直接対話をする。それが AI 時代そして将来の新技术に対して、人間が主体となって異なる意見を融合させ、実現したい社会に向かって進んでいく原動力になると信じている。